

## 草創の滝山寮と大学を語る

田 代 康 則

今日は、創価教育研究センター主催の講演会で、創価大学の滝山寮の生活や大学での体験を懇談的にお話させていただく機会を与えて下さったことに感謝申し上げます。

昭和46年4月10日、私は、希望に胸を膨らませながら、創価大学第1期生として入学しました。高校時代の3年間を創価学園で、池田先生に見守られながら、学んだ私は、大学も池田先生のもと充実した生活を送れると心から楽しみにしていました。当日、九州から両親も参加して、私は、入学式に出席しました。光栄にも、新入生を代表して宣言をやらせていただきました。真新しい校舎は、私たち1期生を迎えてくれました。しかし、どこか寂しいのです。広大なキャンパスに1期生の七百数十人、保護者の方を入れても千数百人しかいないわけです。体育館は今と同じ大きさですから、そういう中で入学式を行ないました。寂しいのは、空間の問題だけではありませんでした。一番驚いたのはその席に創立者がいらっしやらないということでした。学園も第1回入学式には創立者は式自体には出席されませんでしたが、式典後学園に来られて、学園生との記念撮影等の出会いがありました。ところが大学は創立者もいらっしやらないし、メッセージもないし、式典後も何もない。多くの一期生がどうしたんだろうな、という気持ちを持ったことは間違いないと思います。

創価大学というのは全てが初めてですから、どういう大学になるのか、その大学に行けばどういう勉強ができるのか、どこへ就職ができるのか、全くゼロの状態でした。創価大学を受験した方は創立者が池田先生だから、全く未来も分らない大学ですけれども、とにかく行こう、ということで来た学生が多かったと思います。

そのような学生生活の中で、忘れもしませんが、1971年（昭和46）6月6日、牧口先生の生誕満100周年の会合が聖教新聞社でございました。そこに創価大学の学生の代表10名くらい参加させて頂きました。光栄にも私はその場に参加することができました。会合終了後、「創価大学の学生は皆来なさい」と、池田先生のそばへ呼ばれまして、先生より声

をかけて頂きました。建学の精神は示されておりますけれども、創大生としてどうあるべきか、というようなことを教えていただきたい、という気持ちが強く、思わず、創立者に「創価大学に来てください、寮にも来てください」とお願いを致しました。その時に先生はちょっと考えられたような様子もありましたが、先生は「わかった。学生の主催する行事なら行ってあげよう」とおっしゃったのです。私はうれしくて、早速寮に帰りまして、皆にこの話を伝えました。

当時男子は滝山寮(単に男子寮とよばれていた)、丹木寮、女子は豊田寮、加住寮しかありませんでした。ほとんどの男子学生は滝山寮生でありましたので、「創立者をお呼びする行事をやろう。そうすれば先生が大学へ来て下さる」と訴えたのです。学園にも栄光祭がありまして、これは寮生が夏休みに帰省する前に一度、皆で集まってから帰省しようという趣旨がございましたので、創価大学の寮祭を同趣旨でやろうと話し合いました。その時の全寮代表が、現在のアメリカ創価大学の羽吹学長です。私は北寮の寮長でした。そして急遽、盆踊り大会を中心とした夏祭りを、体育館にやぐらを組んで行ないました。先生にもご招待状をお出ししたのですが、7月3日開催というのにお出ししたのは6月中旬ですから、その時は先生のご都合がつかず、お呼びすることができませんでした。

次は秋の大学祭。これも8月に、ある創大生が先生にお会いした時に、「先生！大学に来てください」とお願いしたそうです。先生は「何があるんだ」と聞かれて、その人は「秋に大学祭をやります」と答えたそうです。それで皆で話し合い、秋に大学祭をやろうと決まりました。寮の中で名称やテーマの検討をしました。名称が『創大祭』ということに決まりましたので、創立者にも早目にご招待状をお出ししました。創立者から「行ってあげよう」とのお話があり、初めて11月21日に創価大学に先生をお迎えすることができました。開学の年に創立者が大学の行事に来学されたのは、この「第1回創大祭」だけでした。

当時の企画書のコピーがあります。初日は11月21日です。12時か12時半頃先生がご到着されたら、まず模擬店を見ていただこうと。それから文系校舎の展示を見ていただいて、文学の池に行き釣りをして頂き、ボートにも乗っていただこうと考えておりました。それから万葉の家に行って頂いて、お茶をたて、琴の演奏を聞いて頂こう。そして2時ごろから体育館で全員が集まっての集会。今で言えば「創価栄光の集い」ですね。以上のような非常に簡単な企画書です。最終的には文学の池のボートは危険ということではなくなりましたけれども。(笑い)

当日、先生に模擬店の品物も食べていただきたいということで、サンマを焼いてそれを出す「サンマ亭」というのがありまして、そのサンマの塩焼きを食べていただきました。展示は1階から3階までの全展示を見ていただきました。学生に対して質問をしたり、一

人一人激励をしていただきました。最後に体育館に行きまして、ブラスバンド演奏、合唱「アイーダ」、琴、ピアノ、フルートの三重奏、剣道の型、女子学生の合唱、トランボリン演技、フルバンド、ギター、民族舞踊（ロシア、メキシコ）等々を力一杯演技し、先生に見て頂きました。ここで初めて先生は私たちにスピーチをしてくださいました。大変短いお話しでございましたけれども、初めて創価大学の学生に対してのスピーチでした。それは次のような内容です。「今後、諸君の後には、何万、何十万という後輩の学生が陸続として創価大学の門に入ってくることでしょう。その後輩たちのためにも、いま皆さん方は、道なき道を、すなわち人間教育の先駆をきった軌跡を、建学の精神に貫かれた軌道を作っていかなければならない」と。一期生はこのお話を伺い、創大の先駆者としての自覚を深めたと思います。今卒業生が3万数千人です。現在は創立30周年ですけれども、100周年になれば、1期生も30期生も草創の時代に大学生活を送ったということになると思いますので、現役の学生の方々もこれから陸続と続く後輩のための道なき道を切り開いていていただきたいと思います。先生は更に「私はその教育に、陰ながら少しでも尽したい、こういう気持ちで創価中学、創価高校に、全力を注いでまいりました。同じように大学生の諸君に対しても、陰ながらの応援をしてまいりますが、私は皆さん方に対しては、オックスフォード大学をはじめ、伝統ある世界の有数大学のあり方と同じように、各々が偉大な人格を持つ人々として相対していきたいのです。いささかたりとも皆さんを“生徒”ていどの扱いにはしたくない。私よりも何十倍、何百倍も偉い無限の可能性を秘めた人格者であると、私は心の底で尊敬しております。いやしくも大学にあっては、フランスでもイギリスでも、学生というものは教師との関係では対等であった」と言われております。これは第3回入学式での創立者講演の「創造的人間たれ」につながる言葉であります。最後に「この意味において、これからも、私は諸君らの、成長を、何よりも楽しみにし、何よりも期待をかけ、陰の陰の立場で、諸君の味方として、応援してまいりますことを申し上げておきます」とおっしゃっています。今連載中の『新・人間革命』でも「菊作り菊みる時は陰の人」とおっしゃっていますが、創立者として創立する時は一生懸命やるけれども、出来てからは教育者あるいは職員でやって欲しいというお話もあります。このお話のなかの「陰ながら」というお話の中に、当時のさまざまな状況があったのではないかなと、学生心に思いました。創価大学に来て何を学ぶのか？創価の学び舎でしか学べないものを学んでいかなくてはいけない、と考えた次第です。そのときの私達の創大祭のテーマも、「ロマンと英知と表現と」というものになりました。学生としてロマン、夢を持って学生生活を送ろう。夢だけでは駄目だ。英知も磨かなくてははいけない。英知を磨いて、ロマンも持って。このことをどう表現するか。その表現の場こそが創大祭なんだ。そういうことでこのテーマに致

しました。私たちの表現したものを創立者に見て頂きたい。見ていただいて、何らかのお話も頂きたい。そこに私たちの求めているもの、私たちが表現したもの、これが本当に創価大学の精神にあってるのかどうかを確認していきたい、という思いが強かったように思います。

そして2年目に入ることになります。2年目に寮制度いうものを作りました。2期生を迎えるにあたりまして、しっかり迎えようと思いました。我々の時はそういうものがなかったけれども2期生が入ってきた時にはいろいろ準備をして、温かく迎えよう。そうした趣旨で寮に残って後輩を迎える希望者を募りました。当時部屋が50部屋ありまして、2人ずつ、100人残ってもらいたかったんです。当時寮が1部屋12人で、ワンユニットですから個人のプライバシーはゼロです。皆そういうのは嫌だと下宿やアパートに出て行って、残ったのは70人くらいだったと思います。70人が春休み早めに寮に帰ってきまして、2年目の寮をどうしようかという話しました。その中でまず寮の名前をつけようという話になりました。当時は特別な名称はなく、男子寮1号棟・2号棟...、といていたんです。でも男子寮1号棟・2号棟では殺風景だし、名前を募集しました。皆がいろいろな案を出しまして、その中で「滝山寮」というのが一番賛成が多かったのです。当然「滝山寮」というのは「滝山城」の名前から取りました。そして各棟の名称も、「1号棟」「2号棟」ではなくて、東・西・南・北にしようということになりました。お気づきのことと思いますが、「滝山寮」には「西寮」がないんですね。最初は東・西・南・北にしようということだったんですけれども「中寮」の寮長が「中寮」というのは4つの寮の真ん中にある。我々は真ん中だ、中心だ、ということで「中寮」になったんです。「西というのは西方浄土に通じるからよくない」というもっともらしい理由をつけて、外したんですね。早速、南と東と北と中という名前をつけて創立者に報告しました。そうしたら先生から「滝山城は落とされたのか」という質問を受けました。そんなところまで調べていませんでしたから、すぐ調べますということで歴史をひも解きました。

先生が最近「滝山城址に立ちて」という詩を書かれましたけれども、そのなかにもありますが、滝山城は落とされなかったんです。北條氏照が滝山城主であった時、武田軍が攻めてきて、滝山城を総攻撃したんですけれども2万の大群に対して2千の軍勢で守りきったというご報告を先生にしましたら、「わかった」とのご返事でした。「滝山寮」という名前がここで正式に決まりました。歴史から見ますと、滝山城では守りきれないということで、その後八王子城をつくって移したんです。元八王子にあります。滝山城は廃城になってしまったわけです。八王子城は豊臣秀吉に攻められて、負けちゃったんです。歴史上では第二次世界大戦の八王子空襲で亡くなった人数よりも、八王子城の戦闘で亡くなった人

数の方が多かったという歴史があります。余談ですが、そういうことで「滝山寮」という名前が決まりました。

次に後輩を迎えて、いろいろなイベントをやろうということで、スポーツ大会や先輩を呼んでの講演会を企画しました。更に去年は「夏祭り」をやったけれども、今年は寮祭をやろうじゃないかと話し合いました。「滝山祭」という名称でやろうということで、先生にご招待状を出しました。こうして先生を「第1回滝山祭」にお迎えすることができました。滝山祭をやるにあたって、私が実行委員長をやらせて頂いたんですけれども、その準備のための議論は、喧喧諤諤。それはそれは大変でした。7月の6・7日に開催したのですが、5月にスポーツ大会をやりまして、6月くらいから毎日、睡眠時間が2時間3時間という状況で準備をしました。そういう中で全員が、快くやろうとすぐに一致団結したわけではなく、何のためにやるのか、誰のためにやるのか、等々の議論が多くでたりしました。私個人としては、先生は1年目は1回しかご来学されなかったわけですから、何としても寮祭は先生をお呼びしたい、と思っておりました。とにかく私たちの寮生活、思いを創立者に見ていただこうじゃないかと。私たちが創価大学に集ってきたけれども、創立者の思いに合致しているのか、かけ離れているのか、これは来て頂かないとわからない。是非、創大生のあるべき姿、寮生としてのあるべき姿を話して頂きたいという思いがありました。こうして池田先生に初めて滝山寮に来ていただくことができたんです。先生は寮というのは生活の場であるので、私はあまり行かない方がいいのではないかと話されたとも聞きました。生活の場に創立者が行くと準備も大変だろうから、あまり行きたくないけれど、そこまで皆が言うならということで、ようやく滝山寮において頂いたのです。

その年の5月に創立者はイギリスに行かれて、トインビー博士と対談をされました。その時にオックスフォード大学、ケンブリッジ大学も訪問されました。私たちもそういうことを知っていたものですから、滝山寮の広間で展示をやりました。オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、世界のノーベル賞をとった人達の展示を致しまして、先生に見ていただきました。当日は残念ながら雨が降ってしまいました。7月6日ですから梅雨の真っ最中です。非常に残念でしたが、小雨の中、先生を滝山寮へお迎えしました。先生は着かれるなり、こうおっしゃたんです。「今日は雨が降ってよかった。晴れたら暑くてたまらないよ」と。私達は、雨で申し訳ないと思っておりましたから、先生は着くなりそう言われて私達を激励して下さったんですね。それからヒマラヤ杉の記念植樹しました。背丈も私達の背丈よりも少し高いくらいの2メートルくらいの細い木でしたけれども、それが今滝山寮に入るところにある大木になりました。木っていうのはすごいですね。30年でこんな大木になるんですから。先生は「この木の高さをはかっておきなさい。これからはこの木に

会いに来よう」と言って下さいました。先生を寮にご案内しました。南寮の方から入って、渡り廊下を渡って南寮の一部屋に入っていただきました。「皆こういうところで生活しているのか」とベッドルームのベッドにも、ちょっと横になって頂いたんです。「みんなここで寝てるのか」ということで。次に広間の展示を見ていただきました。そこで寮生が作ったそうめんをお出ししたんです。先生は「このそうめんはおいしいね。お世辞じゃないよ。おいしいから食べているんだ」とおっしゃって、おいしそうに召しあがって下さいました。東屋も建てたのですが、それに先生は「春雨亭」という名前をつけていただきました。「春雨じゃないけれども、春雨のように穏やかな雨、という意味だよ」と話して下さいました。また滝山祭を記念して、句を詠んで頂きました。「春雨に 英知波あり 滝山祭」。また「英知の友どち」との御揮毫もしていただきました。そして、先生は次のようなお話をして下さいました。オックスフォード大学に行った時に、大学の関係者に寮を見せて欲しいと頼まれたそうです。大学の関係者は急に寮を見せてくれといわれても困る、というようなことだったみたいです。先生は是非見たいと言われて、見学されたそうです。オックスフォード大学の寮に入って突然ノックして入ったそうです。そこに寮生が2人いたそうです。突然外国人が入ってきてびっくりしたようですが、2人はオックスフォード大学の伝統を大変誇りにしていたそうです。部屋は1人がいいのか、2人がいいのか、大勢がいいのか。いろいろ先生も考えておられたようで、様々な質問をされたようです。そのとき、学生が、この寮からはイギリスのこういう指導者が出たんだ、首相が出たんだ、と誇らしげに先生に語ったようです。オックスフォード大学の寮の部屋は狭くて汚い部屋だったけれども、私たちは世界の学生なんだ、このオックスフォード大学を卒業した人たちがイギリスの指導者にどんどん育っていることに誇りを持っていた、というお話をして下さいました。創価大学はまだ伝統はないけれども、君たちがその伝統を作っていくんだと、激励をいただきました。ノーベル賞に関する小さな研究展示をご覧になって、「創大生が一人ノーベル賞をとればすごいことだ。それが創大の勝利につながっていく。一人出れば後輩につながっていく」とのお話がありました。その展示に、寮長の使っているコップが置いてあったんです(笑い)。それを見て先生が「今はなんの価値もないけれども、この中から誰かノーベル賞をとれば、このコップだって価値が出てくるよ」と激励をしていただきました(笑い)。本当に寮生を一人一人激励して頂きました。中央体育館に場所を移して、「記念フェスティバル」を行ないました。今覚えているのは「滝山の29日」。寮の生活をユーモアにミュージカル風にしたものです。先生はなかなか上手だといってくださいました。この時に、各寮が寮歌を作ったんですね。東寮、中寮、南寮、北寮、丹木寮、豊田寮、加住寮が自分達の寮歌をつくりました。その寮歌を先生の前で唄いまし

た。先生はその時に、「いい歌だな」と言われ、「これをレコードに残してあげよう」と言われたんです。その時ある人が、寮歌というのは毎年毎年作って、その中で素晴らしい歌が残っていく。一高寮歌、三高寮歌も代々作って、そのうち本当に素晴らしいものとして残ったものです。その時にレコードにしたらどうでしょうか、と言ったんです。それでレコード作成は中止になりました。今となっては大変残念です。

先生はスピーチで「滝のように 激しく 滝のように 弛まず 滝のように 恐れず 滝のように 朗らかに 滝のように 堂々と 男は 王者の風格を持て」。との詩を先生が奥入瀬で撮られた写真の裏に書いて、ある人に贈ったことがあるということを紹介してくださいました。その中で先生は更に「私は一応創価大学の創立者ということになっております。ですから私は皆さん方学生が、真剣にここで学び、遊び、人格を陶冶し、思い出を作り、さらに21世紀への雄飛の土台を固めて、すべての人が健康で、将来社会のために貢献していただければ、本当にうれしいし、陰ながら、いつもその事を祈っております」と話された。ここでも先生は、陰ながらとおっしゃっております。さらに「日本でも何百という大学がある。世界を数えれば何千何万という大学があるでしょう。その大学の中で、いかなる意義で、いかなる縁で、いかなる目的で創価大学に入ったか、ということだけは誇りにしていただきたい。我々は、他の大学には行かなかった、創価大学に來たのだ。世の中には数多くの伝統ある大学があります。また有名な大学もあります。だがそうした既存の大学では、なすことのできない人間教育という一点がある。創価大学にあっては、その一点だけは、どの大学よりもそして誰よりも誇りとし、名誉として後世に伝えていただきたいのです」と話されて私たちを激励してくださいました。創価大学に來たのは、色々な縁がある。なかには国立大学を<sup>えにし</sup>けって創価大学に來た人もいでしょうし、親から言われて來たくなかったのに親孝行のつもりで來たという人もいでしょう。なかには受けた大学全部落ちて創価大学しか受からなかったという人もいます。それはたまたまそういうことであって、創価大学に來たということ自体を誇りにしてもらいたい、と先生は言われておられるのだと思います。創価大学にしか出来ない人間教育。建学の精神のひとつである「人間教育の最高学府たれ」の「人間教育」という意味は一体何か。教員に学問を学び、教員に激励され、時には議論することもあるでしょう。また友人同士で、先輩後輩、その中で切磋琢磨するということも含まれと思います。しかし私は創価大学でしかなすことの出来ない人間教育、これは創立者の精神を自分の血肉にできるかどうか、という点にあると思います。創価大学の特徴という意味を考えると、これしかないのではないかと思います。池田先生を創立者と仰ぎ、いろいろな場でのスピーチや、個人的な出会い等を通してその中で学ぶ人間教育、これが他の大学ではなすことのできない、創価大学でしか出

来ない人間教育ではないかということが、お話を伺った時に強く感じたことでした。短いスピーチではありましたが、創立者の学生に対する深い思いが感じられ、皆心から感動しました。

滝山寮に先生がいらっしゃたのはもう1回ございまして、昭和50年の4月に入寮式にいらしたんですけれども、これは中国の留学生を初めて迎えた時でした。私は、その時は大学院に進学していたのですが、大切な中国の留学生をお迎えするということで寮へ呼び戻されまして、留学生と一緒に生活しました。先生は留学生の入寮する日に、突然寮に行くということになったそうでした、滝山寮の広間に先生が来られて、話をされました。スタンドマイクが私がななめに倒して、そのマイクで話をされました。その時に先生が中国の留学生を迎えるにあたっての思い、日中友好の思いを話されました。日中友好は私の遺言だということをその場で言われた記憶がございます。当時、日本の中には中国を敵対視する傾向がありました。中国の留学生を紹介された後、中国の留学生を皆で守って、仲良くやってほしいということを言われるために、先生は滝山寮へこられたのです。その後は寮は生活の場なので、皆に迷惑だろうということで来られていませんが、その二回だけは、滝山寮の中へ入られました。滝山寮以外では、八王子寮（現友光寮）や丹木寮（今は廃止）、女子寮の豊田寮、朝風寮、朝霧寮、緑寮（今は廃止）を訪問されたこともあります。寮の周りは今でもよく車で回られ、寮生を激励されています。

第2回創大祭にも先生が来られました。2年間で先生が大学へ来られたのはこの3回だけなんです。いよいよ3期生を迎えるということになりまして、入学式に先生が出席されると伺い、1期生、2期生が3期生を迎えるためにどうすればいいか考えました。そこでは創立者から大事なお話があるだろうと思いました。創価大学の将来の展望を語っていただけのような大事な話があるに違いないということで、ただその場で初めて先生のスピーチを聞くのではなくて、我々先輩が新生に基礎的な大学の歴史を勉強してもらおうということを考え、『二十一世の潮流』という小冊子を作りました。この小冊子には先生が創価大学について話されたスピーチを掲載しました。「今はこの小冊子は、薄いものではあるが、この小冊子を手にして大学生活を送った学生達が社会に巣立ち、そして二十一世紀の潮流になっていったときにはじめてこの小冊子の真価が表れると思う」ということが編集後記に書いてあります。我々が二十一世紀の潮流になっていかななくてはならない、ということで作ったんです。大学で作成してもらったのではなくて、学生がお金を出して、編集して、新生全員に配りました。そして池田先生が第3回入学式で「創造的人間たれ」という創価大学の根幹となるスピーチをされたわけでございます。1年後の昭和49年の4月には2つの冊子は非常に厚くなりました。現在これが『創立者の語らい』という名前に変わ



り3巻本になっています。

草創の滝山寮と草創の大学の思い、というものを語らせていただきました。今は入学式と卒業式、そして創大祭の記念フェスティバル等々、様々な機会に創立者が出席され、スピーチをされる。たまに海外へ行かれていて、ご出席いただけないということもございませうけれども、その時はメッセージを頂けるわけです。創立者は、今は大学校内をよく車で回られる時に、学生を激励されたりということがございます。今は、それが当たり前のようになっておりますけれども、創価大学に創立者が来られなかった時の最初の2年間の思いは、正直言って辛いものがございました。先生は第2回の創大祭のフェスティバルで、創価大学は当初は昭和48年に開学する予定だったと話されました。しかしあまりにも学園紛争が激しくいろいろな意味を考えて、昭和46年に開校した。「それゆえに1期生、2期生は本来であるならば創価大学がないのに入ってきたことになる。ここに意味がある」と言われているんですね。「1期生、2期生の諸君はどうか自分達がこの大学の創立者であると自覚をし、本気になってもらいたい」。「誰でも逃れることの出来ない宿命というものがある。そこに腹を決めた時、宿命は使命となってその人の一生を輝かせるのです。私が諸君に期待する真心を汲み取って創立者の学生になってもらいたい」と、お話をされました。1期生、2期生には入学式で話ができなかったけれども、それは創立者と同じ気持ちに立って、一緒に創価大学を作ってきたんだ。そう思ってもらいたいとの創立者の言葉を聞きまして、私達の気持ちはすっきりと晴れました。創立者と一緒の気持ちで大学建設をしていくんだと決意をしました。

この創価大学から創立者の示された建学の精神がなくなるということは、創価大学の意味が全くなくなる。集まってくる教員、職員は創立者の示された建学の精神というものを本当に自分で実践していこう、創立者に気持ちを合わせていこう、という精神がないと、創価大学の良さは出てこないのではないかなと感じます。

創価大学も創立30周年を終え、創立50周年100周年に向けて、出発を致しました。私自身創大の職員として、今こそ創立の原点に立ちもどり、建学の精神を根本にしてよりよい教育環境を整備し、人材の輩出に努めてまいることをお誓いし話を終えたいと思います。

私のつたない体験でしたが、長時間のご静聴ありがとうございました。